

かきおろして、筵道まゐりておりさせ給、西の廊のなかのつまどよりいらせ給て、にしのたいのすのこよりとほりて、わたせの、すのこをわたらせ給て、去んでんに南おもてよりいらせ給て、御座につかせ給ぬ、東宮^{○後}の御座はひらぎなり、みすのうちのありさまおもひやられてゑまし、みやのおまへ^{○彰}のまぢみたてまつらせ給らん、おもひやりきこえさせぬ人なし、入道殿^{○藤}原道長は東の對の北のかたによりて文殿あり、そこにみすかけたり、さるべき僧どもおほくぐしとおはします、みやの女房のありさま、寢殿のにし南おもてよりにしの渡殿まで、すべていとおどろおどろしうもみぢがさねいろをつくしたり、つねの事どもなればいひつくさず、にしのたには上達部つき給ぬ、さるべくみなものなごきこしめしまゐりて、やうくふながくどもこぎいでたり、そはひこまがたなご、さまぐまひいで、いまは東の對にわたらせ給、又そこにて大床子におはします、すこしさりて東宮おはします、平座なり、あるじのおとををはじめたてまつり、上達部殿上人みなひきつれて東の對にまゐり給、いづれの殿ばらもみな御装束めでたきなかに、關白^{○道長}の御まがさねのさくのひへぎ、かやきてめどまりたり、くらべむま十八番也、なまよろしきをりのだに、のり人も馬もいみじういどみてどみにやはいづる、むまの心ちもいとみじう世にめでたしと思て、どもすればいどはひき入くするほど、いとみじう心もどなく見えたり、さてのみあるほどもひさしければ、やゝたびく仰らるれば、出そめてたびたびに成て、左右かたみにかちまけするほどの亂聲のおどもはしたなげなるまでおかし、かちまけののり人のかづけもの、ほどなごかたわきいどみたり、又やがてこのなかのどねりどもかた人して、東宮の帶刀ども、あひまじりて騎射いさせ給、勝負の舞なごもおかしうてはてぬれば、かくその物のねごも、くらうなるまゝにいみじうおもしろし、なかじまにぞ、樂所はせさせ給ける、上達部殿上人なごも、いにしへ中頃なごの事おぼえ給は、またあがりてもかゝるこ